Journal of Culture and Information Science, 8(2), 23-25,（March 2013）

資料紹介

「纒向型土壙（註１）」について

児玉　駿介

1. はじめに

纒向遺跡は、奈良盆地東南部（奈良県桜井市域）に位置する古墳時代前期前半を盛期とした大規模遺跡であり、立地や検出された大量･多彩な遺構･遺物等から、その時期において突出した存在だったと考えられている。なかでも本稿において紹介する桜井市辻地区の大型土壙 1, 2, 4 の 3 基は石野博信氏が提唱したいわゆる「纒向型土壙」の典型とされ、古墳時代初頭の王権祭祀を考えるうえで重要な問題を提起している（石野編, 1976）（穂積，2012）。

この土壙そのものは従来から知られていたが、最近考古学の立場から王権祭祀にアプローチする研究例が増えており、そのなかで「纒向型土壙」や、土壙 4 の内容に基いて想定された「纒向型祭祀」に対する新たな評価も提示されている。そこで本稿では最新の研究動向を踏まえつつ、改めて「纒向型土壙」の紹介を行う。

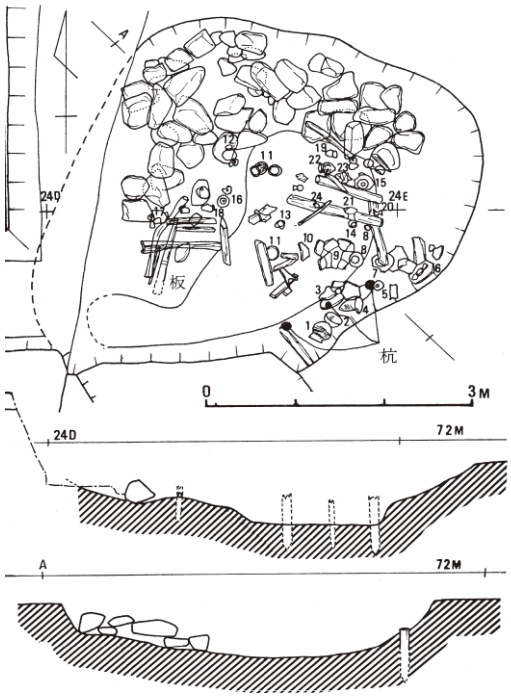

図１　土壙１実測図（石野編，1976）

2. 土壙の紹介

2. 1　土壙１

5m×4.3m の不整形を呈する。深さおよそ 0.9m で湧水を伴う。坑壁に 0.3 ～ 0.5m の礫を積み上げ、石組みをしている。この石組みは必ずしも整然と組まれてはいないが、乱雑に投入された状況でもない。

加えて脇の自然流路側に杭と板材を伴う。土坑埋土には多量の土器と木製品、自然木を含んでおり、一端が焼けているものもある。

2. 2　土壙２

4m×3.2m の不整形で、深さ 0.8m の皿状を呈し、湧水を伴う。下層から出土した胴部穿孔壷型土器を含め埋土からは多量の土器と木製品（円頭棒状木製品、蔦皮、加工木等）が出土している。

2. 3 土壙４

3m×3m の不整円形で、深さは 1.5m を測り、湧水を伴う。埋土からは、大量の土器の他に箕･籠･装飾高坏・水鳥槽・槽・盤・竪杵・機織具・舟型・木包丁・団扇型木製品・弧文円板などの木製品、焼木、稲籾などが出土しており、石野氏によればこれは「マツリ」の後、湧水層まで掘り抜いた穴に廃棄した結果とする。なお、土壙 2 同様、南東 6m 地点に一間四方の建物跡が検出されている。

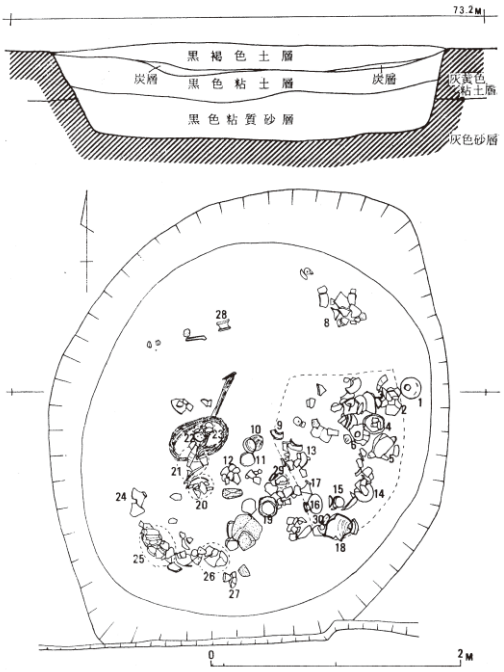

図２　土壙２実測図（石野編，1976）

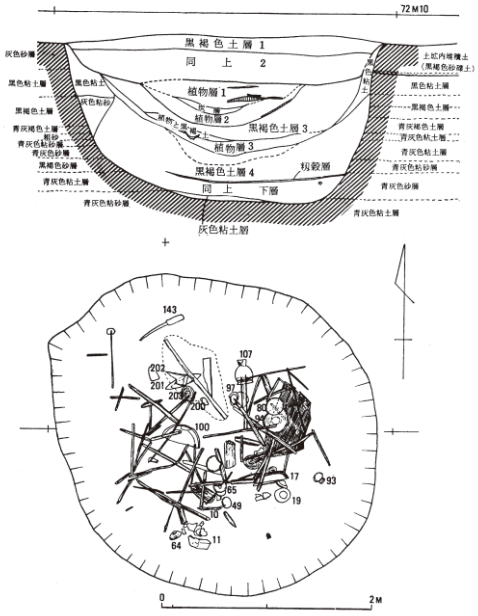

図３　土壙４実測図（石野編，1976）

3.「纒向型土壙」の定義

3.1 研究略史

纒向遺跡における土坑群は報告書が編集された段階において、纒向遺跡北部の桜井市辻地区において29基、同東田地区で5基が確認されている。石野氏は、そのうち先述の辻地区における先に紹介した3基から「大型であること、多量の土器、焼杭を含む木製品と湧水」という共通した要素を見出し、それに基づいて「纒向型土壙」の設定を行った。

なお、石野氏は特に土壙4の遺物内容に着目し、農耕祭祀的性格の「纒向型祭祀」が行なわれた可能性を想定している。かつて氏は弥生時代前期から古墳時代前期にかけての一般的な土壙について貯蔵用土壙として整理しているが（石野，1967）、纒向遺跡の土壙の性格に関しては「貯蔵」だけでは理解しがたいとしている。

しかし、穂積裕昌氏の「纒向型土壙」及び「祭祀」に関する論及では、辻土壙1に関して、自然流路に隣接して立地していること、土壙の自然流路側には杭と板材の存在がみられたということ、壙壁には石積みが依存していること及び石野氏が指摘した「纒向型祭祀」の条件とされている木製品の出土量が少ないことから、他の2つの土壙とは性格を異にしているとしている。

このように、石野氏の3つの土壙を共通の性格の遺構とみなす視点に対して、選地や遺物組成等から穂積氏のように「纒向型土壙」の概念をより細分化しうるという見方が存在する。

3．2　再定義にむけて（予察）

このように、「纒向型土壙」の定義とその分類には異論も存在し、再定義・細分化の余地も残されていると考えられる。

そこで、上記のような先行する分類を踏まえつつ、「纒向型」といわれる大型土壙の要素を整理してみた（表1）。

表１

土壙	自然流路に隣接	建物に隣接	木製品
1	○	×	少量
2	×	○	少量
4	×	○	多量

なお、先述の紹介でも述べた通り、土器に関してはいずれの土壙からも一定量の出土がみられる。

上記の表から明らかなように、石野氏が述べた湧水や大量の土器を内包していたということ以外の要素にも着目すると、むしろ3つの土壙間では差異の方が大きいと考えられる。

なかでも出土木製品に関しては、質・量共に土

壙 4 が圧倒的に突出している。しかも、穂積氏がすでに指摘しているが（穂積，2012）、それらは具体的には舟形・鳥形、加飾高坏といったしばしば形象埴輪に造形される遺物である。従って、仮にそれぞれの土壙が祭祀的性格を備えていたとして、土壙 4 のそれは他の 2 つ、特に自然流路に隣接し石組みを備えた土壙 1 とは大きく異なっていたと考えられる。

このように非常に雑駁ではあるが、「纒向型土壙」という定義・分類には、当該遺跡で見つかっている他の土壙も含め、再検討の余地があることと、加えて「纒向型祭祀」には複数の形態があった可能性について述べた。詳細な検討は、今後の課題としたい。

文　献

石野博信　1967 「弥生時代の貯蔵施設」『関西大学考古学研究年報Ⅰ』関西大学考古学研究会
石野博信編　1976 『纒向』桜井市教育委員会
穂積裕昌　2012 『古墳時代の喪葬と祭祀』雄山閣

註

1 「壙」の表記は報告書に従った。